

不可思議微笑

深野治

地球の裏側、という表現は独善的なものだそうだ。こっちは表側と思っけていても、丸い地球の向う側からいわせれば、向こうが表になるのに、あたかも日も差さない地球の陰みたいな「裏側」呼ばわりは、しゃらくさい、ことになる。

南米大陸一日本からいえば、ちょうど反対側に位置する太陽の国々を、私はインカ帝国の栄光と悲劇のドラマを通じて思い描いてきた。

たまたま、ひよんなきっかけから、アルゼンチンに移住した一家ともう数年越しの文通を断続的に交しているのが、唯一、具体的なつながりだったが、米倉徳さん夫妻が、ペルーへ長い旅に出かけたことで、また一つ身近に感じられるようになった。

米倉さんの友人たちは、「何で、ペルーくんだりまで遠征するのか」とずいぶん訝しがっていたが、私にも、米倉さんをペルーへ呼んだ力が何であったのか、いまもしかとはわからない。

しかし、長い旅から帰ってきた米倉さんの顔は、長い歴史を黙々と生き続けているペルーのインディオの人々に似た、おだやかな微笑といくぶんの疲労をただよわせていた。

世界で一番高所の鉄道に乗って山地に入り、現地の人たちと暮らしを共にしながら、土をこね、糸を紡ぎ、織りを学ぶ生活だったという。

それにしても、不思議なのは、普通ならば、はるばる異国へ出向いて現地の技法技能を学んだ人ならば、帰国後すぐにでも、その経験を生かした制作活動を始めだろうに、米倉さんは、そうした動きを一向に始めようとしないことであった。

うん、まあ、と何ともはつきりしない返事をしながら、しきりに考えこんでいるばかりである。

せめて現地の見聞を書きとめてほしいとお願いして、絵と文で綴ってもらったのが新聞(フクニチ)の連載になった。

良酒は熟成によって得られるように、米倉さんの息の長い思念の中で、ペルーの体験はいまもじっくり発酵を続けているのであろう。

何ごとであれ速成をよしとする風潮の中で、米倉さんのたたずまいは貴重である。

深く観ることなくして、真の制作はあり得ない。

米倉さんが、何を観受したのか、その答えは、おそらく、もっとずっと先にならなければわかるまい。

いまは、わずかにその一端を窺うチャンスとして、この出会いを大事にしたいと思う。